７/２６　第一ペテロ１章24―25節「永遠に立つ主のことば」

小池 宏明 牧師

今日は記された聖書がどんな困難に遭っても、守られてきた不思議さを覚えたい。

一部の国を除いては、世界中の誰もが聖書を手に取って読むことができるが、歴史の中では、聖書が邪魔扱いされて、大きな迫害を受けてきた。

＊エレミヤ３６章の聖書焼却事件

紀元前６０５年、旧約聖書エレミヤ書 36 章によれば、南ユダの悪王エホヤキム王が怒って、預言者エレミヤに与えられた神のことばを記した巻物を燃やしてしまう聖書焼却事件があった。エホヤキム王は、ユダ王国が滅びる、という預言の言葉を受け入れることができなかった。しかし生ける神のことばである聖書は、たとえ燃やされても、また、書き直されて、今日まで残されて来た。激しく反対する者がいても、焼き捨てられても、主のことばは消え去ることはない。

＊罪を指摘し救いに導く聖書

歴史の中で聖書が迫害を受けて来たのは、為政者(専制君主)にとっては、自分たちの支配体制を邪魔する都合の悪い教えだったから。もう一つ、聖書が迫害を受けた理由は、人々の罪が明らかに指摘されてしまうからだ。パウロは新約聖書ローマ人の手紙の中で、自分の罪を自覚して嘆いた。「**私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たとき、罪は生き、私は死にました。それで、いのちに導くはずの戒めが、死に導くものであると分かりました。**」（7 章 9，10 節）また、パウロは、律法（十戒）の御ことばには「**隣り人のものを欲しがってはならない**」とあって、それを聞いて、自分が当たり前のように思っていた欲望が罪であることに気付いた、とも証言している。人のものを欲しがることは日常茶飯事のこと。いつも他人と比較しては、うらやんだり、嫉んだり。主の言葉が邪魔になるのは、かつての専制君主たちだけではない。今日に生きる私たちだって、聞きたくない、耳の痛い言葉がいくらでもある。真剣に御ことばに耳を傾けるなら、切り刻んで燃やしてしまいたいほどに不都合な御ことばだってある。私たちは、時に、片目をつぶって、飛ばして読もうとする御ことばがあるかもしれない。しかし、聖書(神のことば)は罪を厳しく指摘しておいて、それだけ終わりではない。パウロは気付いた。律法(十戒)の御ことばは、素晴らしい良い知らせであり、福音であるイエス・キリストの許へ導く養育係の役割を果たしているのだと。(ローマ８章)

こうして、旧約と新約の聖書の御ことばは、時代を超えて、民族を超えて、決して変わることも廃れることもない神のことばとして、世界中で宣べ伝えられている。今日の御ことば、ペテロの手紙第一１章24、25節のとおり。「**「人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは永遠に立つ」とあるからです。これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。**」